

塩屋地区「地藏盆」(写真3)

毎年8月24日に行われる100年以上続く行事。地藏堂の前で「なんまいだー、チンカラドン」と言いながら大きな数珠を左から右へ回す。墓地周辺は108の灯りがともされ、人々はそこを歩いて墓参りへ行く。

上高柳地区「孟蘭盆会」(写真4～6)

毎年8月24日に行われる100年以上続く行事。108の灯りがともされた道を通り、子育て地藏と荒神様を祭ってあるお堂でお参りをして、きな粉のおにぎりをもらう。その後、墓地へ行ってお参りをする。さらに、地区のみんなで盆踊りをして祖先の霊を供養する。



上高柳老人クラブ会長
宮本 豊重さん

子どもの頃からあった孟蘭盆会。中学生の女の子がおにぎりを握り、男の子が火をつけて。昔は風除けもなく「あっちの火が消えたぞ、はよつけろ」と言っていたのが懐かしいです。成人して県外で働きましたが、こんな行事を行っている場所には巡り合わなかった。地区の行事は、ここに住む意味を与えてくれる魅力です。

「どんなに珍しいものでも、そこにあるのが当たり前すぎて、みんな価値が分かっていなかった」
このように自身の経験を話すのは、近代化遺産活用アドバイザーとして、県内の町並みの保存活動に取り組む岡崎直司さんです。
8月7日、まさきふれあい学園の町民企画講座「かんざき塾(※)」で、「まちづくりアーカイブズと松前」と題して講演を行った岡崎さん。講座では、「遺産を活用したまちづくりは、『見視観看』の見方をしてほしい」と訴えました。「見視観看」は、目に足を付けたフットワークの「見」、対象物をくつきりと示して見る「視」、心の目で見る観察の「観」、目に手を添えて見る看護の「看」のことです。この見方を踏まえ、さらに話を続けます。
「先祖が守ってきたものも、なくなると前がどうだったか分からない。地域の思い入れで保存も変わります。町を看の心で見えていますか」
岡崎さんが話す近代化遺産とは異なりますが、「保存し、守り受け継ぐための考

え方」は、伝統行事も同じです。その地区では当たり前に行われている伝統行事。皆さんはその価値や大切さを考えたことがありますか。
大きな数珠を使う、百八の灯りでもすなど、祖先を供養する方法も地区によりさまざまです。町外では、各地区で故人をしのぶ行事を行わない所も多くあります。
伝統とは、「ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えてきた信仰・風習・制度・思想・学問・芸術など」を言います(広辞苑)。
伝統行事は、先祖が大切に育て後世に伝えてきた、その地区にしかないもので、松前町の地域全体の魅力です。紹介した以外にも、さまざまなものがあります。次のページからは、それらに携わる人たちが、どのような方法や思いで行事を行っているのか迫ります。
※かんざき塾は5ページで紹介。



近代化遺産活用
アドバイザー
岡崎 直司さん

伝統行事。 それは、他にはない 地域の魅力。

夏やお盆に、町内の各地区で、恒例の伝統行事が行われました。それらを写真で切り取ってみると、他の地区の人は知らない珍しい行事ばかり。皆さんは、その行事の魅力に気付いていますか。



特集

地域の誇りを 後世へ



昭和53年度の大念仏

ぜんしやうけん 禅正軒の大念仏(写真1～2)

毎年8月12日、神崎の禅正軒で行われる行事。神崎・出作・鶴吉地区の住民が東西に分かれ、手にうちわを持って大念仏を唱え、戦国時代の領主「平若左近」と、その家来や馬を供養する。

平若左近は神崎郷の領主だったが、豊臣秀吉の四国討伐で領地を没収される。

その後、関ヶ原の戦いのとき、当時の松前城主加藤嘉明が戦地に出兵した際に挙兵。しかし、馬と共に討死にし、家来も殉死した。以降、深夜に鈴音が聞こえ、禅正軒へ首なし馬が走るという噂が人々を苦しめるようになったため、3村が協議し、大念仏をあげ供養することとなった。

中断の時期もあったが今も続いており、当日は墓地で祖先を供養する人も多い。

Interview



毎年、村芝居を見えています。芝居はアドリブがあって面白いです。何より、村芝居には自分たちの知っている人が出ていることがいいところだと思います。



10年目になった音響の担当に責任を感じるので、師匠の話を聞きDVDを見て練習を続けます。地区での顔も広がる村芝居。これからも携わりたいです。



村芝居を通じて知り合いも増え、地区との距離も近くなったと感じています。感情を入れて演じるのは難しいですが、これからも力になれるときは力になりたいです。



村芝居は見たことがあって、楽しそうだなと思っていたので、参加しました。最初は緊張したけれど、練習を頑張ったので、うまくできたと思います。またやりたいです。

「小さな集落だけれど、村芝居があると地区のつながりができる」と文化部長を務める徳田唯純さんは話します。今年は、小中学生も役者として参加して、地区の輪を広げました。主役を務めた八東健さんも「若い世代も育ってきました。これからも村芝居を大切にしていきたい」と意気込みます。

虫干祭で欠かせないものとなった村芝居。これからも、役者、裏方、観客が一体となり、地区のつながりを深めていきます。

役者、裏方、観客
三者でつくる地区のつながり

1_練習風景。左が主役の八東さん 2_おひねりが舞う 3_影で支える裏方 4_終了後、芝居を振り返る 5_あいさつする座員。右端が徳田さん

Pick up

かんざき塾 —ふるさとのことを学びながら、絆を強める—

「かんざき塾」は、生まれ育ったふるさとのことを子どもたちに知ってもらいたいとの思いから、平成21年に活動を始めたグループです。亥の子などの伝統行事を行ったり、ふるさとの歴史を学んだり、大人も子どももふるさとのことを学びながら絆を強めています。26年には神崎地区全体でのどんど焼きも復活させました。

本年度からは、対象を神崎地区以外にも拡大し、より多くの人が松前町について学べる場となっています。



※まさきふれあい学園の町民企画講座として実施中。希望者は、高石さん(☎984-5992)まで。

かんざき塾では、ふるさとのことを学んだり、世代を超えてみんなで体験したりすることで、「住んでいるふるさとのことを知り、ここに住んでよかった」と思ってもらいたいと考えています。今年から神崎地区以外の人でも参加できます。今後、町全体をテーマに取り上げていきますので、ぜひ参加してください。



かんざき塾 主宰
高石 勤さん



徳丸地区「虫干祭と村芝居」

―廃れた伝統を復活させ、地区の絆を育む―

8月2日、徳丸の高忍日賣神社では、無病息災を願って「虫干祭」が行われます。そこで余興として演じられるのが、かつて農村で親しまれてきた「奉納村芝居」です。戦後、廃れていたこの芝居が復活した背景には、地区に住む人々のある思いがありました。



涙の甲州路：病気の父が自殺し孤独となったおさよ。おさよを託された関の弥太郎は、おさよを彼女の亡き母の実家に預け、名も告げず去る。10年後、おさよが10年前の恩人と名乗る男と望まぬ結婚をさせられると聞き、弥太郎が再び立ち上がる。

虫干祭は、「夏越し」の大はらいとして、大昔から行われていた行事です。茅の輪をくぐって半年の罪やけがれを除き、残り半年を無事に過ごせるよう神様に祈ります。他の神社では「夏越祭」と言われますが、高忍日賣神社では、祭りにあわせ神様の御衣などに風を通して虫の害から守っていたことから、虫干祭と呼ばれています。

この祭りで、多くの人に親しまれてきたのが「奉納村芝居」です。村芝居は、江戸時代から農村で、祭りのときに神社の境内などで演じられてきました。徳丸地区でも、虫干祭で行われてきたものの、戦後、若者が都市へ移住。さらに、多様な娯楽が生まれたこともあり、演じられなくなっていました。

「かつて、徳丸の人たちが一体となり行っていた村芝居を活用して地区を盛り上げたい」平成8年、芝居を復活させようと「徳丸一座」が立ち上がりました。メンバーは、徳丸地区に住む有志たち。地区への思いを熱演に変えた芝居は、今年で21年目を迎えました。

幕が上がると、鬼気迫る演技で観客を魅了させたと思えば、アドリブで笑いを誘う役者



Interview

大間区長
郷田清人さん



昔、火流しではベニア板に108本釘を刺して火をともしていました。復活させたいと考えていたときに、大間には火流しだけでなく灯籠流しもあるから、使わない手はないと思ったんです。そこで、今年は老人クラブが作った灯籠を借りて、川岸に108個並べました。伝統ある火流しを受け継ぐため、大間の人だけでなく、より多くの人に見てもらえる行事に発展させたいと思っています。



火流しをした
窪田 真弥さん

別の地区から大間に引っ越してきましたが、そこには火流しのような行事はありませんでした。だから、最初に見たときはびっくりしました。同時に、その様子はとても伝統的な感じもしました。火流しは、実際にしてみると熱いけれど、いろいろな人と触れ合えて楽しいです。後輩たちも続けていってほしいと思います。

川岸で見守った
武智 ヨシエさん
大政 登世子さん
郷田 陽子さん



昔、火流しが行われる川では、米や野菜を洗ったり行水をしたりしていました。だから、みんな親しみがあるし、この川の周辺は両岸に家が並んでいて風景がいいところなんです。火流しは、私たちが小さいときから、子どもたちが行っていました。川岸から火流しを眺めていると生活が豊かになるように感じます。毎年見続けたい風景です。

特集 地域の誇りを後世へ

大間地区「火流し」



老いも若きも
みんなでつなぐ



—伝統を発展させながら受け継ぐ—

大間地区「火流し」

8月14、15の両日、大間地区を流れる国近川沿いで行われる、全国的にも珍しい火祭り行事の「火流し」。伝統を受け継ぐ中でも、その様子は少しずつ変化しています。

火流しは、板の上にわらを乗せ、火をつけて川の中で引つ張ることで、故人の霊を迎え、翌日、同様にして霊を送るお盆の伝統行事です。「戦時中、電灯の光を隠していたときも火流しは行われていたと聞きました」

「昔はいかだに乗せず、たくさんのわらを積み上げて火流しを行っていました」

地区の人からは、火流しに関するさまざまな話を聞くことができ、長年親しまれた、大切に受け継がれてきた行事だと分かります。

しかし、近年は子どもが減少し、流し手の小中学生の男の子をはじめ、燃やすわらの確保も難しくなり、以前のような盛大さも失われてきました。その中で、昨年から小中学生の女の子が流し手加入了。さらに今年は、他地区の人に火流しを知ってもらおうと町長や岡田校区の区長を招いたほか、新たな試みに挑戦しました。

8月14日、川岸には色とりどりの灯籠が並びました。この灯籠は、毎年8月25日に行われる「灯籠流し」で使われるものです。「老人ク

ラブが作った灯籠を使わせてもらいました」と話すのは、同地区の区長を務める郷田清人さんです。続けて、「若い子たちは、昔のことを教わる機会が少なくなりました。そこで、今年は精霊馬を作りました」と話します。

なすを牛、きゅうりを馬に見立て、故人の霊が速い馬に乗って帰って来て、ゆつくと牛に乗って戻るように作られる精霊馬。昔は、当り前に見られたものです。

地区の魅力の灯籠を活用し、精霊馬で行事を行う意味を理解した上で、男女が力を合わせ火流しを行う。「伝統ある火流しを広く受け継いでいくため、地区以外の多くの人に見てもらえる行事に発展させたい」

時代の変化に応じ、流し手の子どもと、それを見守り支える大人のみなで、伝統ある火流しは、後世へ受け継がれていきます。



8月25日に行われた灯籠流し(表紙写真)

各地区で大切に守られている伝統行事。そこには、子どもから大人まで、伝統を受け継ごうと協働している姿がありました。このように協働できるのは、それぞれが、その行事の魅力に気付き、携わる中で、行事や地区に「誇り」や「愛着」を感じているからです。

皆さんは、自分の住んでいる地区の行事、歴史や特産など、地区のことを知っていますか。「何もない、知らない」と、魅力に気付かず生活してしまったり、特別なものも当たり前と感じてその価値を見誤ってしまったりしていませんか。

魅力に気付く行動に移すと、その事柄への理解を深め、そこに携わる人との絆を深めることができます。そうすることで、その事柄や自分の住んでいる地区、そして松前町という地域への誇りや愛着も生まれてきます。

皆さんも伝統行事だけではなく地域の魅力に気付く、誇りや愛着を持って、後世につなげていきましょう。